

銭形平次捕物控

橋場の人魚

野村胡堂

青空文庫

一

八五郎の顔の広さ、足まめに江戸中を駆け廻って、いたるところから、珍奇なニュースを仕入れて来るのでした。

江戸の新聞は落首と悪刷りあくぐずであつたように、江戸の課報ちようほう機関は斯う言つた早耳と井戸端会議と、そして年中どこかで開かれている、寄合よあひい事であつたのです。

「お早うございます。良い陽気になりましたね、親分」

八五郎といえども、腹がいつぱいで、でっかい紙入に、二つ三つ小粒が入っていると、こんな尋常の挨拶をすることもありません。

「たいそう機嫌が良いじゃないか、——お前の大変が飛び込まないと、——今日は大きな夕立でも来やしないかと、ツイ空模様を見る気になるよ」

「へッ、天下は静謐せいひつですよ、——親分におかせられても御機嫌麗わしいようで」

「馬鹿野郎、御直参ごじきさん見てえな挨拶をしやがって」

「親分の縄張り内はろくな夫婦喧嘩もねえが、三輪みのわの万七親分の縄張りには、昨日ちよい

としたことがあつたそうで」

「チョイとしたこと——という」と

平次に取つては、八五郎の『大変』よりは、この『チョイとした事』の方に興味を惹ひかれるのです。

「橋場の金持の息子が、土左衛門になつたんで、いつこうにつまらない話で」

「まだ桜が散つたばかりだぜ、——泳ぎには早いし、金持の息子が、身投げするのも変じやないか」

平次はこの短い報告の中から、幾つかの腑ふに落ちない点を見出して居るのです。

「あつしも、変だと思つたから、昼過ぎに覗いて見ました。死んだ息子の親許の、橋場の伊豆屋ものぞいて見ましたがね——」

「待つてくれ、橋場の伊豆屋の伴せがれが水死したというのか、そいつはお前、大した金持の子じやないか」

その頃は江戸八百八町と言つても、人口にして百万に充たず、有名な物持や大町人や、筋の通つた家柄は、御用聞の平次ならずとも大方諳そらんじていたのです。

橋場というところは、いちおう江戸の場末のようですが、吉原という不夜城を控え、向

島と相對して、今戸から橋場へかけて、なかなかの繁昌であつたことは想像に難くありません。

その橋場の中ほど、錢座ぜにざ寄りに、伊豆屋は質面替の組頭として、古い暖簾のれんを掛けておりました。

「大した金持なんですつてね、こちとらには付き合ひはねえが」

「当り前だ。——尤も、伊豆屋の名前は聴いているが、主人は何んと言うか、伴はどんな男か、お前の言い草じゃねえが、俺も付き合ひはねえ」

「主人は、因業いんごうで禿はげ頭で、恐ろしく達者で、釣が好きで、五十年輩の徳兵衛。伴は菊次郎と言つて、芝居の色子見たいな二十一の好い男、青瓢びょうたん箆へらで、鼻声で、小唄の一つもいけて、女の子には持てるが、飯の足しになることは一つも出来ない」

「たいそう悪く言うぜ、怨みうらみでもあるのか」

「質を置きに行つて断られたわけじゃないから、恩も怨みもありやしません、——その色息子の菊次郎が、自分の家の潮入の池から笹舟のような小さな釣舟を漕ぎ出し、隅田川の真ん中で引っくり返して、舟は両国の中程の橋桁げたに引つ掛けて居たが、本人は土左衛門になつて、百本杭ぐいで見付かつた」

「それは気の毒な」

「死んで見れば気の毒見たいなもので、そのうえ菊次郎には許嫁の娘があつたんですよ」

「フーム」

「伊豆屋に引取られて、あつしもちよいと逢つて来ましたが、とんだ良い娘でした。近いうちに祝言させることになっていたが、息子の菊次郎はそれを嫌つて、向島あたりの凄いのに通いつめ、父親の伊豆屋徳兵衛は腹を立てて、押し籠め同様にしているという噂でした」

「よくあることだな」

「向島の凄いののは、あつしも見ませんが、許嫁というのは、伊豆屋の主人が若い時世話になつたとかの武家の娘で、孤児みなしごになつたのを、五年も前から引取つて育てたということでした」

「フーム」

「少し武家風かも知れないが、それはそれは良い娘でした。あの娘を嫌つたりして、罰の当つた話じゃありませんか」

「若い男と女が、いっしょに育つたりすると、反つて兄妹見たいな心持になつてしまつて、

夫婦の情は湧かないものらしいな」

「いつこうつまらねえ話でしょう。伊豆屋の若旦那が土左衛門になったと聴いて、橋場まで行つて見ましたが、三輪の親分が睨め廻しているから、諦めて返りましたよ。いちおう両国へ廻つて、死骸も見ましたが、両国の水除けか橋桁でやられたようで、首のあたりにひどい打撲のあとがありました。たつたそれだけでたいしたことはありませんよ」

八五郎の報告はたつたそれだけ、何んの変哲もなく話を結びました。

二

「あの、お客様ですが」

平次の女房のお静は、障子を開けて、そつと取次ぐのです。

「どなただ？」

「あの、お名前は仰しやいませんが、若いお嬢さんで」

「どれ、あつしが行つて見ましょう」

若いお嬢さんと聴くと、八五郎は早くも立ち上がつて、お静を掻いのけるように。入口

へ顔を出すのです。

「あわてた野郎だ」

苦笑いする平次の前へ、八五郎はニヤニヤしながら戻って来ました。

「来ましたよ、親分、とうとう」

「何が来たんだ、少し顎あごの紐を締めろ」

「伊豆屋の若旦那の許嫁ですよ。お夏さんとか言った、そりゃ良い娘で」

「それがどうした？」

「橋場から、駕籠かごで来たんですって。伊豆屋の息子が死んだのが、どうしても怪しいことばかりだから、錢形の親分に調べて頂きたいんですって」

「三輪みのわの万七親分は？」

「水死に何んの疑いもないからと、帰ってしまったそうで、——お嬢さんは路地にいますよ。呼んで来ましようか」

「ともかく逢つて見よう」

平次が引受けると、八五郎はさっそく格子戸をガタピシさせながら路地に飛び出し、「さアさア此方へ、ズイと入って下さい。遠慮することはない」

などと如才しよさいもありません。

八五郎に追つ立てられるように、平次の家へ入つて来たのは、噂の通りの良い娘で、十九というには若々しく、媚こびも誇張もないので、少し淋し過ぎますが、眼鼻立ちの端麗な、いかにも武家風な感じのする美人でした。尤もつとも身みななりはありふれた町娘で、少しの厳いめしさもあるわけではないのですが、折り屈まみがキチンとして、少し浅黒くさえある、白粉おしろいっ気のない顔立ち、それもまた不思議な魅力です。

「どうなすつた、お嬢さん。伊豆屋さんに何か変つたことでも」

平次は誘いの水を向けるように声を掛けました。

「いえ、何んにも変つたことはございませんが、私の腑ふに落ちないことを、親分さんにお訊ねしたいと思ひまして、父とうさま様にも内証で、出入りの若い衆に頼んで、送つて貰ひました」

ピタリと膝に手をおいて、静かに仰ぐ浅黒い顔は、刻みがはつきりして、唇の線の美しさも、睫毛まつげの長い眼も非凡ですが、およそ十九の娘とは思われぬ、確しつりしたものを持つてゐるのです。

「どんなことが変だと思ひました。お嬢さん」

平次は八五郎のモヤモヤするのを縁側に追い退けて娘と二人相対しました。

「伊豆屋の総領、菊次郎さんが水死したことは、御存じでしょうね」

「それは今しがた八五郎から聞きました」

「その水死した菊次郎さんは、隅田川に夜中に舟を出して溺れた様子ですが、菊次郎さんは、よく舟が漕げなかつたのです」

「？」

「そのうえ、両国の水除けに引掛つた死骸の首に、紫色になつた大きな打撲うちみがありました
が、それは首の急所で、打つてはならないところです。そのうえ、橋場で舟から落ちて、
両国まで流れるうち、泳ぎを知らない菊次郎さんは、生きている筈もなく、両国へ行つた
ときは、息が絶えている筈でございます」

「で」

「死骸になつた菊次郎さんが、水除けに引掛つたとき、首筋を撲うつたくらいのことで、
黒血が溜る筈もございません。打たれて黒くなるのは、生きている人に限つたことと成つ
ておりますが——」

さすがは武家の娘で、この十九の娘の、眼の届くには驚きました。首筋と言うのは多分、

頸部の大動脈だいどうみやくでしよう。

「それだけで？」

「まだございます、——菊次郎様は、五百両の大金を持出したことは判っておりませんが、舟にも、橋場近い川底にも、両国近くにも、菊次郎様の懐かいちゆう中にもなかつたそうでございます」

「フーム」

「それだけの大金を持っていらつしやれば、船は沈んでも、御自分は溺れても、お金の始末はしたと存じますが」

「その金は、どうした金で」

「昼のうちに、奥蔵から出して、翌日は朝のうちに、人様に払うお金だつたそうでございます」

「若旦那が持出したのは？」

「さア、そこまではわかり兼ねますが」

お夏はそれだけは言い兼ねた様子です。おそらく若旦那の菊次郎が、向島とやらにいる女みづめに貢ぐために持出したものかもわかりません。

「で、お嬢さんのお望みは、私に何をさせようと仰しやるので」

「菊次郎さんは人手にかかつて、害められたものに違いもございません。その下手人を親分の手で挙げていただき、私は菊次郎様の無念が晴らしとうございます」

お夏は確しかと言いきるのです。が、その顔には少しの苦渋も、嘆きらしいものも見られなかったのです。

「お心当りは、下手人の？」

「私は何んにも存じません」

これ以上は、無理に訊いても、お夏の口を開ける見込みはなかったでしょう。平次はしばらく考えておりましたが、

「参りましょう。三輪の親分には悪いが、どうも放っておけないような気がする」

「有難うございます、親分。それで私の気も済みます」

お夏は、首を垂れて、始めてホロリとしますのです。この娘は何を考え、何を目論んでいるのか、平次にも見当はつきません。たった十九の娘が、こんなに利巧な筈はなく、こんなに思いきった行動をとれそうもなく、それよりも、こんなに非人情な筈はないように思えるのです。

三

お夏の駕籠かごを先に帰してやって、平次と八五郎は、その後から続きました。橋場に着いたのは、やがて昼近いころ、彼岸も過ぎ、桜も散り、仏誕会ぶつたんえが近くなつて、江戸の町もすつかり初夏です。

「ね、親分、良い娘でしょう。銘仙めいせんに黒い帯、拵こしらえは地味だが、人間はそれよりもまだ地味で、ちよいと冗談も言えないが、あんな娘は反つて、情が深いんですつてね。化粧をした、ジャラジャラした娘と違つて、何んとなくこう神々しいじゃありませんか。——伊豆屋の若旦那が、食いつけなかつたのも無理はありませんね」

「無駄を言うな、それ、もう伊豆屋だ。大した構こえだな、お前が先に入つて、御主人に逢いたいと言つて見ろ、——お夏さんに逢つたなどと言ちやならねえ、宜いか」

「へエ」

八五郎は心得て店から飛び込みましたが、しばらくすると恐ろしく酸すっぱい顔をして戻つて来ました。

「こいつは親分も見当はずれでしたよ。お嬢さんがもう四半刻も前に戻って、旦那の徳兵衛に打ちあげ、御主人が自分で出迎えましたよ」

「そんなことか」

これは平次も少し予想外だったようです。暖簾のれんをくぐると、手代が二三人、帳場格子から立って来た五十男——それは言うまでもなく主人の徳兵衛で、

「これはこれは錢形の親分さん、娘が飛んだ御無理を申上げたそうで、申訳もございません。いやもうこの節の若い者と来ては」

と、揉手もみでをするのです。筋肉質の確りした中老人で、柔弱だったという倅の菊次郎に此べて、これはまた、武家あがりと言った恰幅かつぶくです。

「飛んだことでしたね、お嬢さんが仰つしやるのもいちおう尤もで。ともかく、いちおう調べたうえ、諦めて頂くものなら諦めて頂くようにしなきやなりません」

「尤もなことで、ではまア、此方こっちへ」

主人の徳兵衛は平次と八五郎を引いて、土蔵の前の、人目に遠い小座敷に案内しました。娘のお夏は冷たいほど素気ない挨拶をしたつきり、お茶を運んで来て、あとは顔を見せないのは、八五郎をがっかりさせます。

「何より先に、あのお夏さんというお嬢さんのことを伺いたいのですが」

「飛んだ出過ぎたことをしたそうで、ああいった気性者も親譲りでございます。あの娘の父親と申すのは、立派な御家人でした。良いお役まで付いたのを、私の粗相を庇かばつてくれたばかりに役目を縮尻しくじり、五年ほど前浪々の身で亡くなりました。その遺言で娘のお夏を引取り、私は娘のようにして育てました」

「若旦那の菊次郎さんとは？」

「親同士の許嫁で、本人もその気でいるようですが、伴の菊次郎は、お夏の気性を嫌って、祝言をする気にもならず、しだいに放埒ほうらつに身を持ち崩して、飛んだことをいたしてしまいました」

「飛んだ事というのは」

「向島にお銀の茶屋というのがございます。水すい神しんの森の中で、花時は大した繁昌ですが、そのお銀と申す、如何いかがわしい女に溺れ、家を外にいたしますので、この春から一と間に押し込め、窮きゆう命めいをさせておりました。私の許しがなければ、一と足も外へは出られないように、座敷牢と申しては大袈裟おおげさですが、一と間に押し籠め、嚴重な見張りをつけたのでございます」

「だが、若い男と女は、どんな工夫をしても思いのたけを言い交します。倅も、どうして鍵を持出したか、座敷牢を抜け出し、表も裏も見張りが厳重で出られないので、庭の池から、水門をくぐって隅田川へ出た様子です。庭の池は潮入で、水門一つで隅田川に通じます。池には小さい釣舟がありましたので、それを漕いで出たようで、まったく呆れ果てたことでございます。そのうえ、前の日の夕方に用意した、五百両の小判を、風呂敷包にして持出したようで、小判と風呂敷がないので、あとでそれを知りましたが――」

主人徳兵衛の話はかなり長いものでしたが、大店の主人らしく、倅の放埒と不心得を苦々しがりながらも、涙を含んだ調子は争うべくもありません。

「お店の様子では、お葬いはまだのようで」

「検屍に手間取って、倅を引取ったのは昨夜でした。それから入棺をしたり、お通夜をしたり、親類たちを集めたり、今日はようやくお葬いを出すことになりました」

「それでは、仏様を拝まして下さい」

「どうぞ」

主人の徳兵衛に案内されて、平次と八五郎は奥の部屋に入って見ました。親類の人達や

近所の衆で、家の中はなかなか混雑しております。

仏様の前はいちおう整えられて、線香が部屋一パイに燻ぶっております。

平次はいちおう拝んだ上で、早桶を開けさせました。水死人並みの不気味に膨れた死骸と思いきや、中の死骸は細々と痩せて、左の首筋に牡丹のように開いたのは、お夏の指摘した凄まじい皮下出血です。

死骸には傷の痕はなく、物馴れた平次の眼には、これは溺れたものではなく、首の大動脈を激しく撃たれて、咄嗟に死んだことは争う余地もありません。

四

伊豆屋の店の者をいちおうは調べました。が、これはまったくの無駄骨折りでした。倅の菊次郎の放埒が始まってから、主人の取締りは恐ろしくやかましく、夜分の外出などは思いも寄らず、そのうえ菊次郎は独りぎめの通人肌で、店の者などとは交渉もなく、菊次郎に怨みを持つ者などは想像も出来ないことです。

それに質両替という商売は、多勢の奉公人を必要とするわけではなく、暗くなつてから

外へ出たのは、下男の元吉たった一人、これは宵のうちに帰って、菊次郎が外へ出たのは、それから大分経つてから、おそらく橋場の渡し舟が停つてずっと後、たぶん真夜中近い刻限だったでしよう。

「引き潮が亥刻よつ（十時）時分、水が浅いと、水門から舟が出ませんから、俵が出たのは、真夜中過ぎになります」

主人の徳兵衛はそう言うのです。こうして下男元吉の疑いは、綺麗に拭ぬぐい去られたわけです。

その元吉というのは、喰えそうもない三十男で、俵菊次郎とは一番よく馬が合いそうでしたが、時間の喰い違いが大きいので、まったく問題になりません。

「さて、雲をつかむようなことになつたぜ、八」

平次が少し持て余すと、

「まだありますよ、親分、この家の二番目息子、徳三郎に当つて見ちやどうです、兄の菊次郎と違つて、堅い一方の評判の良い男ですが、——先刻さつきまだ店にいたようですが——」

八五郎は平次を誘つて店へ引返しました。暗い廊下を曲つて、納戸なんどの前へ出ると、

「——」

八五郎はソツと平次の袖を引くのです。

「——」
 平次も妙にギョツとした心持で立ち竦すくみました。若い男と女が、納戸の後ろで、何やら密々ひそひそと語り合っているではありませんか。しかも、二人とも、涙を流しているのです。

「あ、親分さん」

立ち竦んだのは、女の方——菊次郎の許嫁のお夏でした。男の方は軽く一礼して、身かわすように、隣の部屋にヒラリと避けてしまいます。それはお夏よりは一つ二つ上の二十歳そこそことも見られる、色の浅黒い、確りした男で。何んとなく手答えのある、確とした感じを与えます。

「お嬢さん——何んかわけがありそうですね、差支がなかったら、話して下さい」
 「ハイ」

お夏は少ししたじろぎでしたが、悪びれた色もなく平次に従って、納戸の隣の長四畳に入りました。八五郎は心得て、その入口を見張ったことは言うまでもありません。

「ここなら大丈夫でしょう。さア、聴きましよう、お嬢さん」

許嫁の菊次郎の死骸が、まだ葬ほうむりもせず隣ほの部屋にあるのに、弟の徳三郎と、泣いた

り笑ったりしているのは、確りものらしいお夏の態度としては、いかにも腑ふに落ちないものがあるのです。

「御尤もですが、これには深いわけがあります」

「――」
お夏は端麗な顔を挙げました。まだ頬が上気して、睫まつげが濡ぬれております。

「私と徳三郎さんは、五年前から幼な馴染なじみでございました。私がこの家に引取られる前からでございます。この家に引取られて兄の菊次郎さんよりは、弟の徳三郎さんと、私は親しくしております。菊次郎さんは遊び好きで、私などを相手にしてもくれません」

「――」
「私と許嫁の披露があつてからも、菊次郎さんの遊びが止まなかつたので、私もつい白い歯も見せず、親しい気持になれなかつたので、だんだん他所よそ所よそしくなるばかり、それからの菊次郎さんの放埒は本当に目に余りました」

「?」
平次は黙つてその後を促うながします。

「でも、菊次郎さんが亡くなつて、その手文庫を調べますと、お気の毒なことに、私のこ

とが、いろいろ書いてございました。菊次郎さんは、決して私を嫌ったわけでもなく、私
 が他所他所しくするので、ついたまり兼ねて放埒に身を持ち崩し、向島のお銀さんとやら
 に通い出したようで」

「私はそれを知って、本当に菊次郎さんにすまないと思いましたが。今さら気がついても、
 後の祭りですが、せめては菊次郎さんを殺した下手人を挙げ、それから身を退きたいと存
 じ、明神下の親分さんのところへ参りました」

「ところが、徳三郎さんは」

平次にもその消息はよくわかるような気がするのです。お夏に対して冷淡だったと思い
 込んだ兄の菊次郎が死んだ上は、お夏という獲物はもう、自分のものと思い込んだのでし
 ょう。

「で、お嬢さんは、大方見当がついていることと思うが、菊次郎さんが釣舟で庭の池から
 出るのは、この間の晩に限ったことではなかった筈だと思うが——」

「三月過ぎになると、時々そんなことはあったようでございます」

「それを知ってるのは？」

「私と、弟の徳三郎さんくらいのもの。あとは奉公人たちは遠くにいるので、一人も知ったものはない筈でございます」

「菊次郎さんは舟は漕げなかつたと聞きましたが——」

「私も、それが不思議でなりません」

「この家で舟の漕げるのは？」

「父は自慢でございますが、あとは元吉くらいのものでしょうか」

お夏の答えははっきりしております。

五

「親分、これからどこへ行くんで」

伊豆屋の店を出ると、八五郎は平次の後を追います。

「向島へ行つて見ようよ。菊次郎はそつと夜中にぬけ出して、ときどきそのお銀とやらに逢つていたようだ」

「そいつはたまらねえね、——そのお銀とやらは、大変な女だそうで」

八五郎はまた、揉手もみてをして喜んでおります。有名な美人に逢って見るのを、役得と心得ている八五郎です。

橋場の渡しを越えて、水神の森にかかると、お銀の茶屋はすぐでした。花時が過ぎて葉桜が毛虫だらけになると、暫らくは暇で仕様のないように見えますが。

だが、この葉桜の季節が、お銀の本当の稼ぎでした。お銀の魅力にあこがれた若い男たちは、灯に寄る夏の蛾がのように、水神のお銀の茶屋うかがに覗うかがき寄るのです。

その一人が、伊豆屋の菊次郎であったことは言うまでもなく、これがまた、第一等の施せ主しゅでもありました。葭簾よしず張りの茶店に、いろいろの小旗をなびかせておりますが、奥は普通の家になって、そこにお銀と、茶汲女のお松という十八九の娘がいつしよに住んでいるのです。

「ご免よ」

「あ、銭形の親分さん」

平次が葭簾の中に顔を突っ込むと、お銀は少しあわてて飛んで出ました。二十一、二、年増としまと言つて宜い女ですが、何んとなく、蒼く引締つて、濃い陰影のある女ですが、感情

が激発すると、パツと咲いたように華やかになる不思議な顔の持主です。

すべてが細々として、頼りないようですが、どこかに強^{きょうじん} 韌^{じん}なところがあり、考えようではスポーツ型とも言えるでしょう。花時は五六人の雇人をおくのですが、葉桜になるとお松とたつた二人、淋しいような暮しです。そのまたお松というのは、不きりようで無口で、ちよいと扱い悪い女^{にく}、こんなのがお銀の持っているらしい、暗い秘密の保持には必要なのかもわかりません。

「逢つたことはない筈だが、俺を平次と知っているのか」

「あら、銭形の親分を知らない者はありやしません。江戸中の人で」

「大袈裟^{おおげさ}な」

平次はちよつと舌打ちをした。一方から言えば、江戸中の悪い人間は、皆んな平次を知っているとも取れるのです。

「用事はもうわかるだろうが、伊豆屋の若旦那のことだ」

「溺れたんですつてね。私も長いこと御鼻^{ごひいき}屑^{くず}を受けましたが、お葬いにも伺^{うかが}えない有様で」
お銀はちよつと萎^{しお}れて見せるので、なかなかの風情です。

「いや、若旦那は殺されたのだよ」

「まあ」

「お前のところへ、チヨイチヨイ来るそうじやないか」

「いえ、近ごろは親旦那がやかましくて、座敷牢とかに入れられているそうで、この春からはお目にかかりません」

「座敷牢に入っていると、どうして知った」

「それはもう、世間の噂で」

店の者にも口留めして、世間には知らせなかつた筈——と思ひながら、平次はそこまでは素破抜きませんでした。

「若旦那は、夜中に釣舟で来ることはなかつたのか」

「そんなことはありません。嘘だと思つたら、いつしよに此処に泊っているお松に訊いて下さい。若旦那はもう、二た月もここへいらつしやらないんですもの」

お銀は妙に怨^{えん}ずる色があります。

店の中は思ひのほか貧しそうで、若旦那が滅多に来ないというのも嘘ではないかも知れません。

「すまねえが、ちよいと、家の中を見せて貰いたい」

「え、え、どうぞ、金の茶釜ちやがまも錦の小袖もありやしません。私は家捜しされるのを、指をくわえて見ているのも変ですから、ちよいと遊びに出て来ます」

お銀はそう言つて、粋な着流しのまま、気取つたポーズで外へ出てしまいました。

平次と八五郎は、その留守で、手いっぱい在家中を捜し廻りましたが、なかなか洒落しゃれた着物と、少しばかりの小遣のほかに、大した貯えもなく、これはまったく平次の当て違いでした。

「ちよつとちよつと、お前はいつ頃からここに居るんだ」

平次はお松に訊ねました。

「去年の春からおりますよ」

「たいそう繁昌するようだな」

「それ程でもありませんが」

「伊豆屋の若旦那はチヨイチヨイ来たようだな」

「去年の秋から、今年の春へかけてよく来ましたよ。三月になつてからは、押し籠められたそうで、一度も顔を見せません」

「本当に一度も来ないのか」

「それは確かですよ。来ると、私が追い出されて、その代り小粒一つずつ貰いましたから、忘れるわけはありません」

「なるほどそれは忘れっこはない、——ところでお銀は外へ出ないのか」

「滅多に出ませんよ」

「伊豆屋の店の者は誰か来ないのか」

「下男の元吉さんは、チヨイチヨイやつて来ますよ」

「弟の徳三郎さんは？」

「噂は聴いてるけれど、顔を見たこともありません」

「一昨日の晩、お銀は外へ出なかつたのか」
おととい

「ちよいと出たようです。頭痛持ちでかんしょう性だから、夜風に吹かれるのが好きで、チヨイチヨイ出かけます、——本当に頭痛持ちなんですね。頭へ油をつけるのが嫌いで、三日に一度、五日に一度は洗い髪にしております。あんなに毛を洗つちや悪かろうと思うけれど、本人に言わせると、女の頭の臭いほど嫌なものはないんですって」

「——」
そんな話のうちに、家捜しやさがは大方済みました。一服やっていると、

「あら、もう済みましたの、——千両箱でも見付かりまして」

お銀は葉桜の下を笑いながら戻つて来ました。深い表情ですが、いかにも邪念のない姿です。

「飛んだ邪魔したよ、それじゃお銀」

「あれ、もうお帰りですか、せめて商売物のお茶でも上げるのに」

平次はそれを背そびらに聴いて、一步外に出ると、後に残つた八五郎が、

「お銀、いやさ、お銀さん、邪魔したね。これをご縁に、ちよいちよい来るぜ」

立ち戻つてお世辞を言います。

「ま、飛んだご縁ね」

「ところで、その近づきの印に、氣障ぎざなようだが、手を握らせてくれ」

「あらまア、そんな事なら、——お安い御用ね、頬なつぺたを嘗なめさしてくれとでも仰しやることかと」

お銀が素直に手を出すと、八五郎はその手をムズと握りました。

「ま、痛い、大変な力ね」

「済まねえ済まねえ、ツイ力が入つたんだ。美しい女はとくだぜ」

「とくだか災難だか」

「あばよ」

八五郎は桜の土手を、平次の跡を追いました。

「どうした八」

「とんだ役得で、思いきり柔かい手を握つて来ましたよ」

「タコがなかつたか」

「撥はちタコもありやしません。ありや箸はしより重い物を持ったことのない手ですね」

平次はそれを聞くと小首を傾かしげました。何やら呑込み兼ねた姿です。

六

「親分、見当はついたようですね」

「いや、まだまだそう手軽には行かない。お前は、お銀の素すし姓しょうを知っているのか」

「あつしは知りませんが、原の郷に阿星半七郎あほしという、大変な浪人者がいます。もとはお銀の好きな人で、今は向島一帯を縄張りなづかりにしている侍やくざですが、その男に訊いたらわか

るでしょう」

「それじゃ頼むから、お前はそこへ廻ってお銀の前身を訊いて来てくれ」

「親分は？」

「明神下の家で待っているよ。もつと尤もその前に、もういちど伊豆屋へ行つて、下男の元吉を脅かして見るが」

「へエ？」

八五郎は何が何やら、わけもわからずに本所へ廻り、平次はもういちど橋場の渡しを越して、伊豆屋に引返しました。

伊豆屋は葬とむらいを出したばかり、菊次郎の弟の徳三郎は、お寺へ行つて留守、主人は奥へ籠かごったまま、平次は下男の元吉を呼んで、裏口に引張り出しました。

「元吉、もうわかったよ」

「へエ？」

元吉のげんな顔は見事でした。

「お前はいくら貰った？」

「何を仰しやるんです、親分？」

「明日は五百両という小判を捜してやる、お前はその手伝いをするんだ。今日一日、どこへも出ちゃならねえよ」

「へエ」

何が何やらわからぬ様子の元吉を後に残して、平次は真つすぐに明神下に引揚げました。八五郎が原の郷から帰ったのはその夕方。

「親分、何も彼もよくわかりましたよ。あのお銀という女の背中の灸の痕まで」

「そんなことはどうでも宜い」

「あれは潮来生れで、人魚のお銀と言われた大変な女ですよ」

「何が大変なんだ」

「泳ぎの名人で——尤も手は恐ろしく柔かいから、舟は漕げませんね」

「お前も飛んだところへ気がつく、——よしよし、それでわかった。今夜は少し面白いぞ」
「何があるんです」

「下つ引を三四人狩り集めてくれ。橋場の伊豆屋を取巻くんだ。亥刻（十時）過ぎに外へ出る者をそつと出してやるんだ、その代りしつかり顔を見ておけ」

「へエ」

それから日が暮れるまで、平次と八五郎は退屈な時を過しました。そして、暗くなるとともに、もう一度、橋場へ引返したのです。

「へエ？　また橋場へ行くんで？」

「それも術てだよ。あの辺で頑張つてると、夜釣の魚は出て来ない」

「へエ？」

橋場へ行くと、伊豆屋へは入らず、裏から廻つて、かねて用意したらしい、一艘の舢舨はしけに潜りました。

「八、頭から、その筵むしろを冠れ。少しは埃ほこり臭くさいが、我慢をしろ」

「変な匂いがありますね、親分」

「黙っている、舟を少し川の真中へ出して貰うから、物を言っちゃならねえ」

「へエ」

それは子刻このこのつ（十二時）近い時分でした。兩岸の灯も消え、吉原通いの猪牙舟ちよきぶねの音も絶えて、隅田川は真つ黒に更けて行きます。

「月はないんですね」

「黙っている、今晚に限ってお月様は邪魔だ」

「あ、何んか、水の音が？」

「シツ」

二人は息を殺しました、どこからともなく微かに水の音が響きます。

それから暫らくのあいだ、八五郎は生れて初めての長い時間を経験しました。向島の方から一艘の小舟が、灯もなく静かに近づくのです。やがてその舟が、平次と八五郎の乗った舟に近づくと、闇をすかして此方を見ている様子でしたが、何事もないと見きわめがつくと、舟足をピタリと停めて、舳ふなべりから、スルスルと真つ黒な水面に滑る者があるのです。

「もう少し傍へ寄りましょうか、親分」

平次の耳の側で、八五郎は擦くすぶったく囁きます。

「いや、動くな——川の中に竿さおが一本立っていた筈だ、——その竿を見定めておいたのが良かったのだよ、暫らく待て——」

平次の声も、微風のようにそよぎます。

それからまた、やや暫らく経ちました。何やら水の音がして、相手の舟にドツシリした物が投げ込まれます。

やがて物音が大きくなつて、闇の中にも何やら、飛躍的なものを感じると、平次の手が

ら一道の灯あかりがパツと射しました。泥棒がんだ燈です。

「あッ」

八五郎は思わず声をあげました。泥棒がんだ燈の丸い光の中に浮んだのは、何んと、緋ひぢり縮めん緋の腰巻一つになって、裸体になった女の立ち姿、それは全身水に光って人魚さながらの美女、蒼白い顔、肩に流るる黒髪、——それは凄せん艶えんにも、昇しょう華かし去りそうな美しい姿です。

その美しくも無気味な情景シーンも一瞬にして消え、女は身を翻ひるがえして、夜の水の中に、ザブんと跳び込んだのです。

が、その泥棒がんだ燈の光を合図に、舟は八方から集まりました。

舟の中に残ったのは男一人、それは飛び込んだ八五郎に取って押えられました。水に跳び込んだ女の姿は、十数艘の船を動員し、八方から、松たいまつ明まつをかかげて捜しましたが、ついに朝までも見付からず、朝の光の中に、夥おびただしい船はそのまま引揚げる外はなかったのです。

船の中の男は、伊豆屋の下男元吉、船の中には、風呂敷に包んだ、五百両の小判が転がっておりまして。そして人魚のような女は——言うまでもなく水神の森の茶店の女、お銀

の姿だったことは言うまでもありません。

×

×

それより半刻とぎも前、水を潜ひそんで逃れたお銀は、そのまま捨ておき難いものがあつたか、——いや、舟の中に着物を脱いだために、裸体で逃げるわけに行かなかつたか、とにもかくにも水神の森の中の、茶店の裏口に立っていたのです。

「お松さん、開けておくれ、——私だよ」

晩春の水の冷たさに、お銀もさすがに顫ふるえておりました。焔くわに腰を包んだような、物凄ものすごい裸体、流れた毛を持ち扱い兼ねた姿で、そつと雨戸に拳を当てるのです。

内ではコトコトと音がして、お銀の前にガラリと戸が開きました。

「あッ」

それは思いもよらぬ銭形平次の姿だったのです。

「ここへ来るだろうと思つたよ。サア、着物を着るうちだけは待つてやろう」

平次はそう言つて、逃げる思案もつかず、ぼんやり立っているお銀の手に、一とかさねの平常着ふだんぎを投げてやるのです。

「ありがとう、礼を言つたものか知ら、銭形の親分」

お銀はそう言つて濡れたままの身体に袷あわせを引っかけ、蒼澄あおずんだ顔に、ニツコリ淋しい微笑を浮べるのです。

お銀も元吉も処刑おしおきになり、伊豆屋の二番目息子の徳三郎は、それつきり行方不明になりました。菊次郎の許嫁のお夏も、自分から身を退こうとしましたが、養い親の主人徳兵衛に望まれて、伊豆屋に留まり、その後を立てることになりました。

八五郎が絵解きをせがむと、平次は、

「わからないところは一つもないだろう。お銀は菊次郎を嫌つて、五百両の金だけほしかつたのさ。菊次郎が座敷牢に入ると、裏から小舟を出して、すぐ庭の裏の川で、向島から泳いで来るお銀と逢引していたのだよ。五百両持出させた晩、竹竿たけざおで菊次郎を撲り殺したが、五百両という小判を持ち運ぶ工夫はない、お銀は舟は漕げないから、川に沈めて竿を立てて目印めじるしにして置いたのだ。さてあの翌る日は、俺が川を捜すと触れて廻つたので、前の晩元吉に舟を出させて、目印の場所から五百両の小判を取出したのだよ。潮来いたこで育つたお銀は、海女あまのように川を潜る」

「ところで徳三郎はどうなりましょう」

「兄を殺したも同様さ、悪い奴だ。元吉を使って、菊次郎が五百両持つて出るのを、お銀

に知らせたのだろう、——可哀想なのはお夏さ。良い娘だが、少し我が強くて菊次郎といつしよになる気がしなかつたのだろう、——でも自分が好きになれないばかりに、菊次郎があんなことになつた、罪亡ぼしのために明神下まで飛んで来たに違いない」

「でも、あの女は大した女でしたね。人魚と言うのは、あんなものでしょう」

「何をつまらねえ、——あれは竹竿で男を撲り殺す女だ。化物だよ」

「それに比べると、お夏は——愛嬌はないが、良い娘でしたね」

どこまで行つても、八五郎の女人礼讃らいさんは果てしありません。

青空文庫情報

底本：「橋の上の女 —— 銭形平次傑作選※」[#丸2、1-13-2] 潮出版社

1992 (平成4) 年12月15日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1954 (昭和29) 年6月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

橋場の人魚

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>